

小中学校の適正な規模等に関する意見交換会 議事録

1 開催日時

令和7年9月19日（金）午後6時30分～午後7時25分

2 開催場所

西尾小学校 体育館

3 出席者

参加された住民 16名

（春日井市）

教育委員会		部長	森本 邦博
〃	学校教育課	主幹	梶田 傑
〃	〃	指導主事	湯浅 公
〃	〃	課長補佐	深見 健司
〃	〃	主査	安田 和志
〃	〃	主事	杉山 太一

4 議題

坂下中学校区における小中学校の適正規模及び適正配置に向けた検討について

5 会議資料

小中学校の適正規模及び適正配置に向けた検討について（西尾小学校）

午後 6 時 30 分 開会

1 開会

教育部長あいさつ

2 議題

- (1) 坂下中学校区における小中学校の適正規模及び適正配置に向けた検討について

【事務局】

＜本市の基本的な考え方とこれまでの取組について＞

- ・児童生徒数は全国的な少子化の進展に伴い減少を続けており、本市においても、同様に減少していくと推定される。子どもたちにとってより良い教育環境を実現するために、学校の適正規模や適正配置について検討を進める必要がある。
- ・学校規模の区分について、本市では今年 2 月に「小学校・中学校の適正規模の基本的な考え方」を策定し、その中で、規模が小さい学校について、クラス替えができるかどうかの視点から学校規模の区分を設けた。
- ・クラス替えが可能であれば、児童生徒同士の間関係に配慮した学級編成ができることや、集団の中で社会性を身に付けたりできるなど、子どもたちにとって多くのメリットがあることから、本市では、小学校、中学校ともに 1 学年に 2 学級以上あることが必要であると考えている。
- ・どの学年もクラス替えができない「過小規模校」や一部の学年でクラス替えができない「小規模校」について、過小規模校を優先に、適正規模の確保に努めるように検討することとしており、「坂下」「藤山台」「高森台」「石尾台」「岩成台」の 5 つの中学校区にある学校を最優先に検討を進めている。
- ・これまでの取組として、令和 7 年 4 月から 5 月にかけて、対象校区の小中学校 17 校の P T A 役員の皆様への説明と意見交換を実施した。その後 5 月から 6 月にかけて児童生徒やその保護者の皆様に、6 月から 7 月にかけて、地域にお住まいの方を対象にアンケートを実施した。

＜児童生徒数推計について＞（資料 1 ページ）

- ・昭和 41 年度から令和 13 年度までの、西尾小学校の児童数の推移は、昭和 49 年度の 200 人をピークに、令和 13 年度では 82.5%減少の 35 人と推計される。

- ・西尾小学校は、今年度、児童数 57 人、6 学級で、学校規模は全学年でクラス替えができない「過小規模」である。児童数は減少し、令和 9 年度以降は、2 つ以上の学年を 1 つの学級として編成し、1 人の教師が同時に複数学年の授業を担当する「複式学級」が編成されると推定される。
- ・坂下中学校は、今年度、生徒数 348 人、10 学級で、学校規模は、小規模だが、全学年でクラス替えのできる「やや小規模」である。令和 11 年度に一時的に「適正規模」になると推定されるが、令和 13 年度、19 年度、22 年度と、生徒数及び学級数は減少し、学校規模としては「やや小規模」で推移すると推定される。
- ・坂下小学校は、今年度、児童数 422 人、14 学級で、学校規模は「適正規模」である。今後は児童数、学級数ともに減少し、令和 12 年度からクラス替えができない学年のある「小規模」に、令和 22 年度では全学年でクラス替えができない「過小規模」とであると推定される。
- ・神屋小学校は、今年度、児童数 155 人、7 学級で、学校規模は「小規模」である。今後は児童数、学級数ともに減少し、令和 10 年度以降は「過小規模」となり、児童数はその後も減少すると推計される。

＜アンケート結果について＞（資料 2～5 ページ）

- ・「1 学年に 2 学級以上となるように、学校の適正な規模や配置に市が取り組むことについて」の質問では、西尾小学校は、「賛成」の方の割合が、保護者で 42.8%、地域の方で 50%となっている。
「反対」の方は、保護者で 24.5%、地域の方で 27.8%である。反対の理由として、保護者の方は「登下校の時間や方法」を心配する方が多く、地域の方は「地域と学校の関係が希薄になるから」を心配する方が多い。また、坂下中学校区の坂下小、神屋小の 2 校を加えた「全体」の結果と比較すると、賛成の割合が低く、反対の割合が高くなっているが、保護者、地域の方いずれも賛成の割合が反対の割合を上回っている。
- ・先ほどの質問に対して「賛成」と回答した方のうち、「ご自分の子どもが通う学校、またはお住まいの地域の学校が適正な規模や配置となるように取り組むことについて」では、西尾小学校、全体ともに「賛成」の割合が、保護者、地域の方のいずれも高い比率となっている。
- ・学級数については、保護者の方、児童生徒ともに 1 学年に複数学級が望ましいと考えている方が多く、クラス替えを契機に新しい人間関係を構築することができると考えている。
小学生の保護者では、「複数学級が望ましいと考えている人」は 96.4%、小学生では、「複数学級が望ましいと考えている児童」は 82.6%となっている。その中で西尾小

学校を個別に見ると、西尾小学校では、複数学級を望ましいと考えている保護者の方は73.5%、児童では51.1%となっている。

- ・「学校生活において重要と思うこと」では、児童生徒は、「クラスが変わって、新しい友達がたくさんできること」や「運動会などの行事でクラスに活気があること」が大事だと考えている。

小学生では、「クラスがかわって、新しい友だちがたくさんできること」を43.7%の児童が選んでいる。西尾小学校では、同項目を選んだ児童は15.6%で、「クラスがかわって」をイメージしにくいからか、坂下中学校区全体の結果より低い比率となっている。

地域の方は、「多くの子どもたちによる人間関係の広がり」や「子どもたちの登下校」が重要と考えている。坂下中学校区全体では、「子どもたちの通学の距離や方法」を58.8%の方が選んでいるが、西尾小学校では、この項目を77.8%の方が選んでおり、坂下中学校区全体の結果より高い比率となっている。

- ・「魅力ある学校づくりを進めるため、学校の規模や配置を見直す場合に重要と思うこと」では、保護者の方は、「子どもの人間関係に広がりがあること」や「子ども一人ひとりの状況に応じたきめ細かな教育」が重要と考えている。

地域の方は、「子どもたちがより良い教育環境で学校生活を送れること」をとっても多くの方が重要と考えている。

西尾小学校を個別に見ると、保護者の方は、「子どもの人間関係に広がりがあること」や「子ども一人ひとりの状況に応じたきめ細かな教育」に加え、「子どもの通学の距離や方法」も多くの方が重要と考えている。

- ・「学校の適正規模等の取り組みにおいて心配なこと」では、保護者の方は、登下校に関して心配と考えており、登下校については、安全性や時間が重要と考えている。

<本市の考え方について>（資料6 ページ）

- ・「児童生徒数推計」から、坂下中学校は、基本的に「やや小規模」で推移すると推定される。また、小学校においては、令和22年度では、坂下小学校と神屋小学校は全学年で学級数が1学級の「過小規模」であり、西尾小学校においては、複式学級となることが推定される。
- ・「アンケート結果」からは、学校が適正な規模や配置となるように取り組むことについて、賛成意見が多く、複数学級を希望する意見が多い。保護者は、子どもの人間関係に広がりがあること、児童生徒は、クラス替えで新しい友達がたくさんできること、地域の方は、子どもたちがより良い教育環境で学校生活を送れることが重要と考えている。一方で、学校の規模や配置を見直す場合に、多くの方が登下校に関し心配している。

- ・「地域の特性」として、坂下中学校区は、隣接する中学校区と地形的に隔たりがある。また、春日井市に合併前の旧坂下町地区として、地域のつながりがある。
- ・「児童生徒数推計」「アンケート結果」「地域の特性」を踏まえ、本市としては、坂下中学校区の小中学校が適正な規模や配置となるように、具体的な検討を進めていきたいと考えている。

また、検討にあたっては、次のことに留意をする。

- 1 坂下中学校は、「やや小規模」で推移すると推定されることから、その推移を見守る。
- 2 小学校は、地域の特性を考慮し、坂下中学校区の中だけで適正規模等の検討を進めていく。
- 3 登下校の安全性や時間を心配する方が多いことから、バスの利用など通学手段についても検討する。

3 意見交換

【質問者】

なぜ配布資料の児童生徒数推計には、特別支援学級の数字が入っていないのか。

【事務局】

文部科学省が定めている基準では、特別支援学級の数や学校の適正な規模等に関する学級数に含まないため、それに準じています。

決して特別支援学級のことを除外して考えているわけではありません。

【質問者】

複式学級のメリットとデメリットは何か。

【事務局】

メリットとしては、クラスの人数が少ないので、教員が子ども一人ひとりの状況を把握しやすくなります。

デメリットとしては、1人の教員が2学年分の授業やその準備を行う必要があり、教員への負担が大きくなることがあげられます。子どもたちにとっても、教員が異なる学年の児童に対応した授業も行うことから、授業に制約が生じるなど、きめ細かな授業を受けられない可能性があります。

【質問者】

複式学級になった場合、他市の子どもと学力の差が出てしまうのではないのか。また、差が出てしまうと考える保護者が引っ越ししてしまうと、西尾地区の過疎化が進むのではないのか。

【事務局】

学力に差が出るかどうかについて、明確なことは言えません。

西尾地区の人口減少に対して、心配される気持ちも分かります。他市の事例ですが、魅力ある学校づくりを進めることで、転入者が増え、地域の活性化が図られた例もあります。西尾地区においても、より良い教育環境の整備に尽力したいと考えています。

【質問者】

学校規模の適正化等を進めるにあたって、モデルとしている市はあるのか。また統合で成功している地域はあるのか。

【事務局】

近隣市において、現在、学校再編を進めている小牧市や、令和2年に学校統合した瀬戸市の「にじの丘学園」の例などを参考にしています。「にじの丘学園」のように、魅力ある学校を作ったことにより転入者が増え、地域の活性化につながった事例もあります。

【質問者】

統合のスケジュールは決まっているのか。以前、藤山台小学校が統合したときは、どのようなスケジュールであったのか。

【事務局】

現状、具体的なスケジュールは決まっていません。今後、具体的な内容が決まっていけば、それに合わせてスケジュールも決まっていくと思います。

なお、藤山台小学校の3校統合は、約5年の期間をかけて、まず藤山台小学校と藤山台東小学校の2校が統合し、次に西藤山台小学校と統合しました。

【質問者】

藤山台小学校の統合を進めた際、通学区域など問題になったことはあるか。

【事務局】

当時は統合を前提で地域説明会などを実施していたため、保護者や地域の方からは反対の意見が多くありました。通学区域については、新しい藤山台小学校までの通学距離が遠いという意見から、不二小学校に通学区域を変更した地域があります。

【質問者】

現段階で坂下中学校区での具体的な取り組みの構想はあるのか。

【事務局】

具体的な計画はまだ決まっています。まずは、坂下中学校を含めた既存の4つの学校で適正規模の検討を進めていきたいと考えています。通学距離については、文部科学省が基準としている距離があるため、それも参考にし、通学手段を検討する必要があると認識しています。

【質問者】

バスの利用を検討する必要があるとのことだが、バスはどのような運用形態になるのか。

【事務局】

現状、具体的に決まっています。

他市では、既存のバス路線の利用や、スクールバスの導入の事例などがあります。また、スクールバスについても、市がバスを所有し直営で運用している事例や、委託の事例もあるため、今後検討をしていく必要があります。

4 今後の進め方について

【事務局】

- ・まずは、本日開催している意見交換会を坂下中学校区の各小中学校で開催し、その際にいただいたご意見などを取りまとめた上で、次は坂下中学校区全体の単位で、年内に2回目の意見交換会を開催したいと考えている。
- ・その後、各中学校区で保護者や地域の代表の方、また、学校関係者などで構成する、学校づくりを検討するための組織を立ち上げ、学校の適正規模や適正配置について、具体的な検討を行っていききたいと考えている。
- ・次回の意見交換会の日程は、市ホームページでお知らせするほか、保護者の方へはHome&Schoolで、地域の皆様へは回覧板でお知らせする。

5 閉会

午後7時25分 閉会